



高島野十郎 「蠟燭」

(会  
員)  
伊東總吉  
薄井良昭  
太田貞雄  
佐藤裕幸  
杉野和夫  
鈴木忠男  
中井嘉文  
野口勉  
福井豊  
福田豊万  
堀良慶

(敬称略・50音順)



作者不詳 「二人の娘に話しかける村男」 (仮題)

NPO法人あーと・わの会 通称：「わの会」

# 第39回放談会

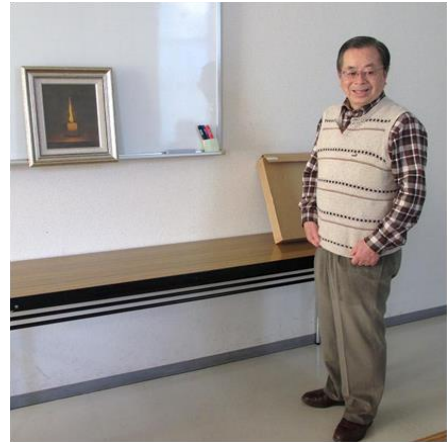


2014年10月25日(土) 9時~11時  
於 東京・京橋区民会館 洋室5号室

# 第39回放談会

1. 日時 2014年10月25日(土) 9時～11時
2. 場所 東京・京橋区民会館 洋室5号室
3. 出席者(計11名、敬称略、50音順)  
<会員>伊東總吉、薄井良昭、太田貞雄、佐藤裕幸、杉野和夫、鈴木忠男、中井嘉文  
野口勉、福井豊、福田豊万、堀良慶
4. 司会進行:佐藤裕幸、 書記:鈴木忠男、 写真・編集制作:野口勉
5. 放談会(発表順)

## ① 太田貞雄



高島野十郎 1890－1975年 「蠟燭」 油彩・板 F3号 制作年:1971年

福岡県久留米市生れ、東京帝国大学農学部水産学科を首席で卒業するも水産の道に進まず画家を志す。初期には主に静物画を、渡欧中は風景画を手がけ、ひたすら自己に忠実に内面を掘り下げ続けた。

昭和35年(1960)、柏の田園風景をこよなく愛し、柏市増尾の地に移り住む。孤高を貫き、昭和50年(1975)に野田市の施設で生涯を閉じる。

蠟燭の図は個展等には出品されておらず、一宿一飯等の謝礼として個人に贈呈しているため100枚以上はあると思われる。多くの蠟燭図がオークションに出品されているが真作か否か不明のものも多い。この出品画も真作か不明なるも蠟燭の炎がよどみなく上るさまが気に入って購入した。謝礼状が貼付されているため、この筆致で真作か否かがわかるかも。

<談> 太田:4万円で購入した。堀:福岡県立美術館に多く収蔵され展示コーナーがある。  
鈴木:そこで1986年展覧会が開催され全国に知られる。三鷹市美術ギャラリーでの「蠟燭画」(20点位)部屋を思い出した。

## ② 薄井良昭



宮本三郎 1903-1974年 「エビ」 油彩・キャンバス 3号 制作年：不詳

1903年石川県、現在の小松市生れ。1922年上京し川端画学校で藤島武二に師事。1927年二科展に初入選。1935年世田谷奥沢にアトリエを新築。死去後、現宮本三郎記念美術館となる。

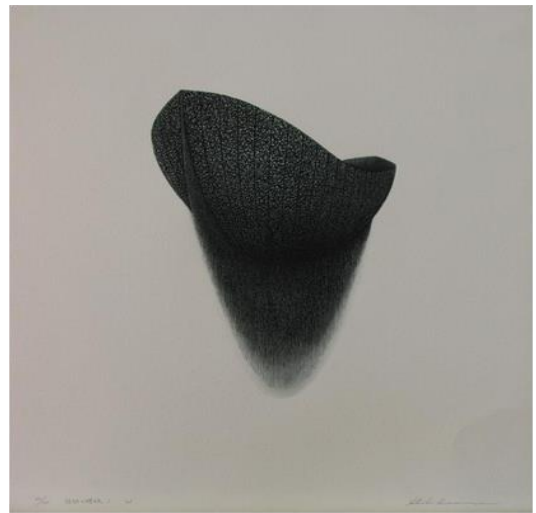
1938年渡欧、第二次世界大戦勃発に伴い翌年帰国。1942年戦争記録画制作のため藤田嗣治、小磯良平らと共にマレー半島、タイ、シンガポールなどに渡る。「山下・パーシバル両司令官会見図」で帝国美術院賞受賞。

1947年熊谷守一、田村孝之介らと二紀会を設立。以降亡くなるまで出品を続ける。1948年金沢美術工芸専門学校教授に就任。1966年日本芸術院会員となる。1974年69歳死去。

戦後は生来の素描力を土台にさまざまに画風を変えながらも人物を主たるテーマとして制作、晩年は花と裸婦を主題とした絵画世界を構築します。エビの現実存在以上の生々しい描写力に惹かれて取得することとなりました。

<談>薄井：毎日オークションで落札した。

## ③ 伊東總吉



柄澤 斉 (からさわ・ひとし) 1950年生れ

「植物の睡眠1」木口木版 7/15 34.5×39.0cm 制作年：1996年

81～83年制作にかかる肖像の連作は内外の著名文化人をとり上げ面白く何点か求めた。

その機智と巧緻をきわめた木口木版の技術に感銘したものだ。

しかし手元に残った本作品は浮遊物体として抽象化され、その質感とバランスには納得しているもののわがマンションの壁面を飾り、創作の意図を私に問いかけている。

参考資料：「版画事典」室伏哲郎著（東京書籍KK 85年）

<談>鈴木：自分もシロタ画廊などで肖像シリーズや木口木版画集（7冊以上）を購入した。この版画は「植物の睡眠」（詩画集、限定40部、24点入り）の1点、その詩人・岡田隆彦は1年後の1997年に亡くなっている。

#### ④ 中井嘉文



朝井閑右衛門（本名：浅井實） 1901－1983年 「夕月」 油彩・板 制作年：不詳

一時期、練馬アトリエ村の一軒に住んでいてアトリエ村の若い住人からは閑さんと呼ばれ親しくしていたようです。豪快なお人柄だったようで舟越保武氏の文章にアトリエの前に素っ裸で縁台の上でシャボン玉を吹いていたとか、他家で昼飯をよばれていた時も素っ裸に浴衣で暑くなってもろ肌脱いで次に浴衣もとってしまい当家の奥さんを驚かせたとか多くのエピソードがある。すでに洋画壇の鬼才と注目され新文展に500号の大作を出す時にはアトリエの柱を切って出したとの逸話がある。この絵は文部大臣賞になった。その後は昭和16年結婚し大森区山王にアトリエをかまえる。一部には精神病の双極障害でうつ状態の時に絵を描いたとの説もあります。この絵は名月の下に親子4人と犬一匹が描かれています。閑右衛門風の絵の具の使い方で見ると判りにくいと思いますがしばらく見ているとだんだん見えてきます。

<談> 中井：日経新聞(10月23日)文化欄に「練馬のアトリエ村交流史」(自筆文)が掲載された。鈴木：横須賀美術館に多く收藏され展示記念室がある。

#### ⑤ 福田豊万



田中拓馬 1977年生れ 「急患」 ミックスドメディア はがきサイズ 制作年：2014年

1996年浦和高校卒業、2002年早稲田大学法学部卒業、2005年二科展入選、2006年青枢会会員  
2007年上野の森美術館大賞展入選、2012年ニューヨークART TAKES TIMES SQUAREのイベントで数万人の中からトップ100に選ばれる。 田中拓馬オフィシャルHP <http://tanakatakuma.com/>

<談> 福田：昨日(10月24日)の画廊巡りのことを話します。ギャラリー「空」(本八幡)で空の会展、ギャラリー砂翁&トモス(日本橋)で田鎖幹夫のロウ画。不忍画廊(日本橋)で東京初個展の二階武宏の木口木版画などを見て「版画全作品集」を購入してサインをもらう。ギャラリーオル・テール(京橋)で濱口真央+中井結二人展を見て、9月に予約した田中の小品をもらう。T-BOX(八重洲)でグループ展。ポルトブレ(新宿2丁目)で林晃久展のお楽しみ袋を買う。鈴木：オーナーは美術修復業で自宅が大磯なので金(オル)土(テール)しか開廊していない。幻想画が主だが鬚光展、長谷川利行展もあり。林氏は女装画家マロンちゃん、オーナーの平井勝正の水彩画はギャラリー汲美(今はない)で3点ほど購入しました。

## ⑥ 福井 豊



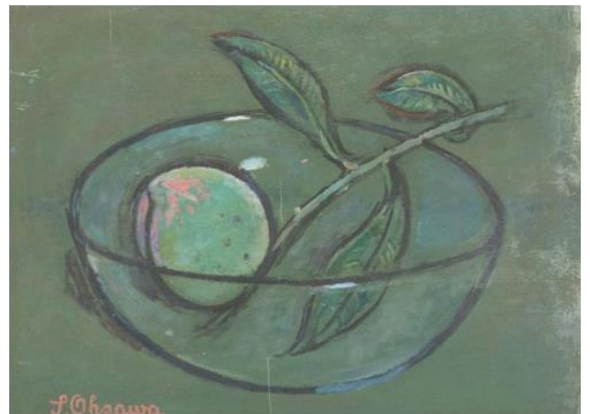
作者不詳(サイン Paul Wunderlich)

「二人の娘に話しかける村男」(仮題) 油彩・板 13×18cm 制作年:不詳

果物カゴを足元に置き、帽子を被った裸足の村男が二人の娘に声をかけている。小品ながら人物の表情まで読み取れて面白い。中東欧にて描かれたものであろう。今は定かではないが25年以上前、芝の東京プリンスホテルで開催されたアンティーク市にて西洋骨董を扱う外国人の業者より購入したと記憶している。この催事は現在も続いており案内ハガキが毎年来る。当時はインターネットなどなくこういう骨董市によく足を運んでいた。その時は気付かなかったというより知識がなかったのだが、サインは超現実の独自のエロスを描くベルリン生れのドイツ現代美術の有名画家パウル・ヴンダーリッヒ(1927～2010)と同じスペルである。若描きの可能性も皆無ではないがサインを後入れした結果的にフェイクの可能性が大であろうと考えている。未調査だが美術館ではないので風俗を描いた細密画として個人的に楽しめれば良いと今は思っている。

<談> 福井:10万円位で購入した。

## ⑦ 堀 良慶

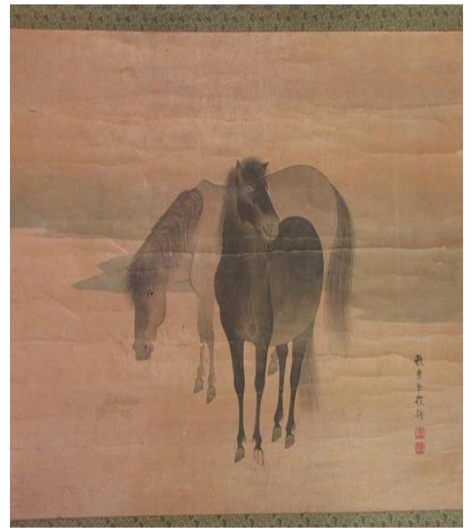


大沢鉦一郎 1893-1973年 「桃」 油彩・板 24×33cm 制作年:不詳

1914年東京高等工業学校図案科中退、愛知知多市古見に移住(療養目的)、1917年宮脇晴と愛美社結成。

興味の或る作家の一人、大沢鉦一郎の作品と出会い直ぐ購入しました。余りに安く、図柄が作家としては単純であったので真贋のことが少し心に引っ掛かっていました。この絵は東近美の大沢鉦一郎の「母の像」の筆致や雰囲気があり、同時期に描かれた作品ではと思っています。この絵を見られたSさんからもサインはOKのようですとご連絡いただきました。この様に引っ掛かりがある場合、身近において一緒に過ごすことにしています。私にとって良い絵であり、飽きのこない絵であれば真贋は関係ありません。真筆である！と結論する癖がついております。勿論、失敗するケースもあります。神田神保町にあるH洞で求めた作品、確か1.5万円、この画廊は神保町の中でも真贋問題のないしっかりした信用ある画廊です。この作品を買ってそのまま何処かに入れて忘れていました。何かの調子に行方不明だったこの作品が出てきたのを眺めています。

## ⑧ 鈴木忠男



作者不詳 「馬上の武者」 天井画  
板に泥絵具か？ 45×44cm 制作年：江戸末期位

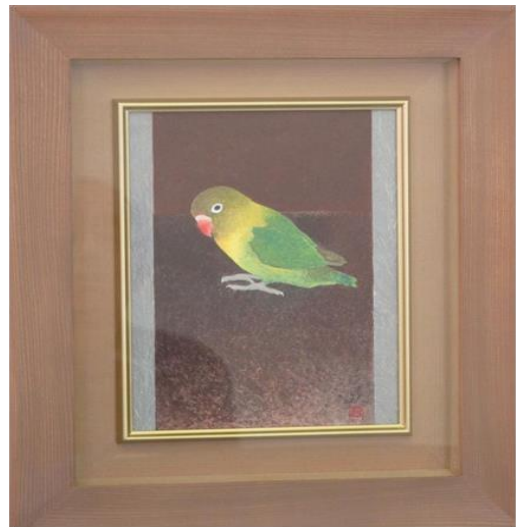
後ろに「一」とあるので絵馬ではなく天井画の一部ではないかと思う。東郷神社の市で買った。今年(午年)もそろそろ終わるので馬の絵を二点持ってきた。

狩野之信(ゆきのぶ) 紙に水墨 40×57cm  
制作年：江戸期

狩野派の祖・正信の次男、兄は元信で室町時代の画家(絵師)である。通称は雅楽助(うたのすけ)、馬の絵が有名。骨董まつり(平和島流通センター)で買った。おそらく江戸期の贋作。

<談> 鈴木：狩野の馬図の絵を撮るため額から外したら「妙像寺日観求之」と書いてある紙片が落ちた。後日ウィキで調べたら「日観上人・越前妙像寺・延享三年」とあり、1746年(江戸時代)であることがわかる。

## ⑨ 杉野和夫



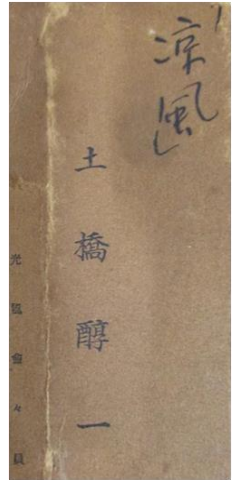
吉田多最(よしだ・たもつ) 1947年生れ  
「禽」 紙本に岩彩色 3号 27.2×20.2cm 制作年：不詳

1970年武蔵野美術大学日本学科卒業、現在無所属

作家の経歴を見ますと日本画家として日展で特選を受賞し日展系で活躍、個展では高島屋を主とした開催をされておられます。なんば美術手帳(高島屋画廊)で次のような談話があります。

(抜粋)「小品はどれもモノの取り合わせ、構図が面白いです！四辺は引力を持っているようで、その中でどこで安定するかをモノのフォルム、空間のフォルムを見ながら探って行きます。最初からピタッとくるとはいいけど、今までの蓄積してきた経験が先生の第6感となって構図を導き出します！...小品を描く時のご自身を「塩をまかれたナメクジ状態」とおっしゃいます。...」当該小禽図を観ますと上記の様な趣向を凝らした作品にピッタリのです。

⑩ 野口 勉

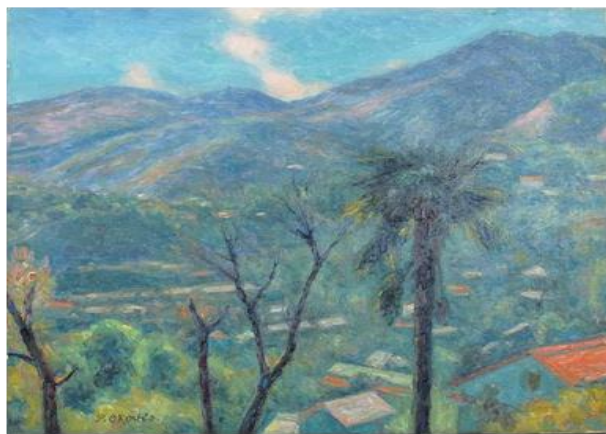


土橋醇一 1910-1978年 「涼風」 油彩・キャンバス F6号  
制作年：1940年代と推定

1938年東京美術学校油彩画科卒業、1940年外務省派遣（ベトナム、カンボジア、ラオス）  
1946年光風会会員、1952年光風会特選、1953年～1973年渡仏 20年間パリで制作活動  
渡仏後は「土橋醇」としてデザイン的な抽象画で国際的に評価されます。作品は東京国立近代美術館、パリ  
国立近代美術館、サンフランシスコ美術館、ミネアポリス美術館、ルクサンプルグ国立美術館などに収蔵。

本作は1940年にベトナム等に外務省派遣された際の作品ではないかと推測します。土橋を著名にした抽象画とは180度違う作品ですが1940年代に光風会に所属していたとなればうなずけます。  
作品の裏側には名刺に本人が記したと思われる作品の題名があります。この美人画は光風会の大先輩たちの影響を受けているように思いますがいかがでしょうか。

⑪佐藤裕幸



大久保作次郎 1890-1973年 「熱海新春」 油彩・キャンバス F8号 制作年：戦後

1915年東京美術学校卒業、研究科に学びながら連続して3回文展特選、1923年フランスに留学、1927年帰国  
以後、帝展、新文展で審査員をつとめ1959年日本芸術院会員、代表作に「マルセイユの魚売り」（東京国立近代  
美術館）などがある。  
画家の特徴である外光派の表現（逆行）が出ていて佳作である。（キャンバス裏側に赤紙に題名・サインの共書あり）

<談> 佐藤：これで3点目の購入、人物のいる風景画が欲しいが手に入らない。  
太田：自分も6点程持っているが全部風景画である。



第39回放談会にて 皆さんの熱い視線が各作品に注がれています。

○次回放談会は平成27年1月に実施予定です。

(文責:鈴木忠男)

前号の訂正について

第38回の6ページ⑩番「洋梨」の作者名が誤っていました。  
(誤) 兵藤和夫 (正) 兵藤和男

本紙をおかりしてお詫び申し上げます。

編集担当 野口



<編集後記>

今回も広い分野にわたる作品群に驚きと喜び楽しみっぱいの充実した2時間でした。  
新年の次回も多くの方の参加を願っています。(の)

発行 : NPO法人あーと・わの会 通称「わの会」

発行日 : 平成26年11月吉日

編集 : 実行委員

佐藤裕幸(司会進行) 鈴木忠男(書記) 野口勉(写真・編集制作)

連絡先 : 事務局 〒277-0871 柏市若柴1-358 堀良慶

TEL 04-7134-8293 [ryokeihori@yahoo.co.jp](mailto:ryokeihori@yahoo.co.jp)

発行部数 : 75部